

『悩み続けるラジオの挑戦』

「コミュニティにおける当事者発信型番組」

小川明子 Ogiwa Akiko
名古屋大学大学院准教授

当事者の困難を理解する

本誌284号では、就労支援事業所に通う依存症や精神障害の当事者、不登校の生徒らが、コミュニティFMで、取材活動を行ったり、困難の経験を語ったりする番組の制作事例を紹介し、住民に放送するという行為が当事者の多様なエンパワメントにつながっている事例を報告した。

こうした当事者発信番組を、今後、他の地域にも広げていく上で何が必要で、どのような可能性と課題があるのかを探るため、私は、2019年から2020年にかけて、福

井県鯖江市のコミュニティFM、たんなん夢レディオ（以後、たんなんFM）で当事者発信番組の実践を行った。第一期は、依存症の回復をサポートする一般社団法人とパイロット実践を行い、その知見と先行事例を踏まえ、第二期には、当事者らが相互にインタビュールしあう番組「悩み続けるラジオ」を立ち上げた。ちなみに当該番組は現在も継続中だ。

番組を立ち上げるにあたり、念頭にあったのは、権利擁護活動、とりわけ問題解決のために行政機関や社会に対して訴えることを指す「アドボカシー」という概念である。アドボカシーには、従来、マスメディア

が大きな役割を担ってきたが、健常者によるパートナーリステイクな描写に対して検討が求められる昨今では、当事者自身が権利を訴え、ニーズに対して行動を起こすスキルを獲得する「セルフ・アドボカシー」や、一般の人々がアドボカシー活動に協力する「市民アドボカシー」の必要性が論じられている。

背景には、医療的な専門知に基づく治療とは別に、同じ困難に苦しむ人々が、互いの経験や現状を告白し、悩みを共有する語りの場を持ち、ともに状況の改善や回復を目指すセルフヘルプ・グループ活動が盛んになっていることがある。困難の

内実や対処法といった彼らの経験の語りには、メンバーばかりでなく、地域社会に暮らす他の潜在的当事者や家族、専門家にとっても本来有用な情報となるはずだが、基本的には仲間内に留め置かれる原則で、社会に向けて語られる機会はほとんどない。

福井県で社会福祉士として、多様な困難を抱える人々の相談、支援活動に携わる藤田正一氏は、常日頃からこの状況に問題意識を抱いていた。当事者らの状況が少しでも地域住民に理解されていけば、困りごとの相談や就職などの機会に、ちょっとした助けが得られることもあるの

ではないか。あるいは困難を抱えている人たちがセルフヘルプや行政へとつなぐこともできるのではないか。この実践はこうした現場の問題意識から始まった。

市民番組制作枠を購入して

声のみという緩やかな匿名性の下で地域社会に気軽に発信することができるコミュニティラジオは、海外では、広く地域社会に意見を伝えるアドボカシーや参加型メディアとして、多様な機会に活用されている。日本のコミュニティラジオは営利企業が多く、視聴者側にもラジオを「活用する」感覚は薄いが、市民、住民がメディアにアクセスすること

を求めた2000年前後のパブリック・アクセス運動の影響もあり、現在も多くの放送局が何らかの形で地域密着、弱者支援を掲げた運営を行っている。こうしたコミュニティFMの運営は「支援が必要な人々や状況並びに表出されていないニーズの発見、発生の予防・未然防止、適切な機関・団体につなぐ」など、ソーシャルワークとも多くの相違点が指摘される（松浦・日比野、2017）。

今回、番組を放送したたんなんFMは「誰のものでもなく、誰のものでもある公共電波を広く市民に開放し、立場・利害・障害・国籍・差別を乗り越え、市民・県民なら誰もがラジオマイクの前に立つ」ことをモットーとするNPO放送局で、レギュラー番組の中でも障害を持つ人々など声が埋もれがちの人々にインタビューする機会を積極的に設定している。同局は、一カ月に一度、三〇分枠を一万円で放送できる番組会員制度を設けており、現在三〇組前後が番組を制作、放送している。今回はこの市民番組制作枠を助成金で購入して以下で紹介するパイロット番組を放送することとした。

『悩み続けるラジオ』

第一期は、依存症患者の支援を行う一般社団法人が中心になって内容を決定し、メンバー間で自由なおしやりを行って、ありのままの自分たちを知ってもらう番組構成となった。この実践では、当初、ラジオで語る意味がよくわかっていなかった当事者が、放送の公共性を意識することによって、語るべき内容や音声表現手法、そして情報を伝える責任

を徐々に自覚し、最終的には、緊張感のうちに生放送を終える高揚感や、「誰か」に伝わったかもしれないという喜びを感じることで、初めて自分たちが地域社会に向けて語ることの意義や楽しさを理解していった。

このときの課題と可能性を踏まえ、第二期の五回の番組実践では、よりアドボカシーを意識した内容にするため、セルフヘルプ・グループを通して最も辛い時期を乗り越えた人々が、その経験を整理して語る番組フォーマットを準備した。社会福祉士の藤田氏が、関わりを持った人々と、その人たちから紹介された計五名（A氏・30代男性、強迫障害など、一般就労継続支援事業所勤務、B氏・20代男性、弱視、一般就労支援事業所利用者、C氏・40代男性、ギャンブル依存症経験者、介護士、D氏・40代男性、ギャンブル依存症経験者、自営業、E氏・30代男性、アルコール依存症経験者、発達障害、一般就労支援施設利用者）を一人ずつスタジオに招く。過度な緊張をほぐすため、別の当事者と藤田氏が質問を投げかけるインタビュール形式を進めた。

番組内容は、困難や回復の過程を整理しやすく、またリスナーも理解しやすい構成になるよう、関係者間で原案を考案した。番組には、1. 抱える困難をわかりやすく表現するキャッチフレーズ（関係者のサポートで自作）の紹介、2. ゲストが経験した困難を語るコーナー（具体的なシーンと理由、当事者から見える世界と苦しみ）、そして3. 再生へと向かう契機「分岐点」、最後に、4. 未来像を表現したキャッチフレーズの提示と説明という四つのコーナーを設けた。この過程は、ナラティブ・アプローチを参考にしており、キャッチフレーズをつける作業によって、客観的に困難を把握し、説明する過程と困難から分岐点、そして未来への希望を時系列で並べること再生への自己物語が無理なく提示されることが企図されている。

一例としてギャンブル依存症のC氏の番組内容を挙げると、彼は前半部分で、過去の自分を「寂しがり屋のギャンブラー」と表現し、賑やかなパチンコ屋の空間が好きで、社長から借金をしながら通い詰め、徐々にやめられなくなっていく苦しさを語った。続いて、分岐点では、体調



▲『悩み続けるラジオ』の収録風景

当事者が得た達成感

このような実践を経て当事者は、地域に暮らす潜在的当事者に、困難な経験の伝達ができたといい達成感を得られた。

例えば、アルコール依存症に悩むE氏は、依存症のセルフヘルプに行く前の自分を思い出し、そうした潜在的な状態にある人々や関係者に対し、当事者にしかわからない逡巡を踏まえた上で、自らの失敗も明らかにしてアドボカシーを行った。彼は「パトンがつながれた、と思ったんです。本音とか、スリッパ（再びアルコールを摂取してしまふこと）してしまったこと、秘密のことをいうと、みんな、怒られるとか、責められるって引つ掛かってしまつて、回復支援施設や依存症の会に来たがらない。それって、当事者だけでなく、支援者側の方にも伝わってないんですよ（E氏）」と、役割を振られたことで、当事者である自分が失敗も含めて語る意義を認識し、それが潜在的当事者に伝えられたという達成感を得ている。

同様に、当事者の家族や身近な関係者からのフィードバックに伴う達

成感も挙げられた。当事者らは、親しい人々にも面と向かって困難の経験や想いを語っていない場合が多く、今回、五名中四名の当事者が、放送の音声ファイルを家族や友人などに聞いてもらい、改めて経験や想いを伝えたという。先に紹介したC氏は、番組を職場の代表や同僚、利用者にも聞いてもらい、そこから、高評価をもらったことで自己肯定感が高まったと述べている。

自分への言い聞かせとして

番組フォーマットと聞き手の問かけの下、当事者らは、自らの経験をわかりやすく説明するために、振り返りを求められた。こうして経験を他者に向けて語る準備は、自らの困難や状況を他者に説明するセルフ・アドボカシー・スキルの向上にもつながるだろう。

例えばC氏は「前半と後半が別のキャッチフレーズっていうのは、ものすごくいいことやと。前半は、本当に苦しいっていう時期のことを言えりた、後半は、どういうことになりたかとかってことを言える」と、過去と未来を結びつけるフォーマットで語ることで経緯を振り返り、こ

こで明確になった方向性が自らの今後や発信活動の参考になったと述べている。さらに依存症経験者全員が、社会に向けて語ることが、自らに言い聞かせることになったと語っており、そのうち二名は、辛い時期を思い返し、新たな将来像を定着させるための自分への「言い聞かせ」ツールとして、番組を録音した音声ファイルを何度か聞き直していた。E氏は「発信することによって、仲間がいるから共に頑張ることができる」とか、一人で抱え込まなくていいよとか、自分の心にも言い聞かせてるような感じになってるんです。発信することによって自分の回復にもつながってるなって、めちゃくちゃ感じるんですよ」と、他者に向けて語ることが自らに言い聞かせることと表裏一体であるとして、書くアドボカシー活動や、番組の聞き手としての役割にも積極的に関わりたいと述べている。

市民アドボカシーの萌芽

『悩み続けるラジオ』では、語り手が聞き手に、聞き手が語り手になることを試みたが、聞き手経験が、他の当事者の困難に対する理解を促す

側面も見えてきた。

強迫障害に悩んだA氏は、聞き手経験から「他の人はこういうつまりいた時期があつて、でも分岐点としてそこから変わっていきましてたつていうのに、すごい関心があるつていうか、それぞれみんないるんなことを見えない部分で乗り越えていってるとなつて」と述べ、他の困難を持つ当事者にも関心を寄せるようになったという。

また聞き手として関わった吃音当事者は、生まれながらの障害に共感があつても、依存症に関しては「自己コントロールが効かない」「「乱暴」というステレオタイプで捉え、関心もなかったという。しかし聞き手としてC氏の話聞く中で「真面目で優しいので、こんな人がキャンセル依存症だったのかとイメージがわかないくらいカルチャーショックで。病気ということ、そしてパチンコの話も聞いて。ニュースでこんな時期（コロナ自粛期）に行くなよと思つてましたけど、全部が全部、批判はできんよと変化がありました」と、当事者の語りを聞くことで見方に変化が起きたと述べている。

このように、聞き手の経験から

も、グループを超えたセルフヘルプ的効果と、困難を抱える人に手を差しのべる市民アドボカシーの萌芽を感じることができているのではないだろうか。

一方放送局としても、たんなるFMでは、これまでも身体障害者やセクシュアルマイノリティの番組を放送してきたが、福祉業界にうまくアプローチできないことが課題であったという。今回の社会福祉士など支援者と当事者との横断的チームの形成と番組構成は、FM局側の負担を減らし、より多様な人々の参加を可能にする一つの有用なモデルとなりえる」と評価している。

か弱い声に耳を澄ます

ある就労支援事業所の支援者は、多くの当事者たちはこれまでの教育やメディア報道で、自分を無力であると思いつつ傾倒があり、自らが持つ経験を語る意義を理解すること自体が、実はかなり困難だと述べる。そうした状況下で、ある程度経験を語りやすい番組形式と、話を聞いてくれる場が準備されることで、強く発信したいと望まなくとも、より多くの当事者がアドボカシー活動に関われるようになるのでは

ないかと語る。

さらに、放送で困難な経験を語ることは、自らのエンパワメントとしても、達成感や自己肯定感、伝達スキルの向上、あるいは単に放送空間を楽しむなど、何かと自信を失いがちな当事者に自信を与える可能性がある」と指摘する。発信する権利を自覚すること、ニーズを表明することとはまさしくセルフ・アドボカシーのプロセスと重なるだろう。

もちろん課題もある。フォーマットに従うことで、定型的な物語様式に帰結しがちで、当事者が抱え続けている困難の複雑性が軽減されがちになるといふ課題や、異なる困難を抱える人が聞き手となることで、相手にどこまで踏み込んでいいのかが戸惑うケースもあった。発信をめぐる語り手のメンタルケアも含め、専門家と同席することなど、より個別事情に即した方法論の開発、慎重な検討が今後必要だろう。

21年5月現在、『悩み続けるラジオ』は複数メンバーで費用を支払い、月に一回三〇分の放送を行っている。コロナ禍においては、統合失調症や身体障害を有する人などにZoomを活用しながら話を聞き、ア

マチユア・ミュージシャンが録音編集を行って番組を制作している。ウエブ会議システムの進展は、今後、閉じられた空間を超えて、寝たきりの人々にも話を聞ける可能性を垣間見せる。

現在番組の差配をしている社会福祉士の藤田氏は「大きなメディアから来る情報ではなく、身近なところから聞かえてくるか弱い声に耳を澄ますことで、マスメディアの仕事とは違う、地域に密着した情報伝達ができるのではないかと。今後は、自身もよりネットワークを広げ、多くの語り手と繋がり、その声を拾い上げていきたい」と「ロミニニティ・ジャーナリスト」としての抱負を語っている。

【参考文献】

松浦さと子・日比野純一（2018）「ソーシャルワークとしてのコミュニティメディア 社会的包摂機能の観点から」龍谷大学社会科学研究年報（49）pp.117-127.

※本実践にあたっては、2018年度ユニバーサル財団、2019年度放送文化基金の研究助成金を得ている。記して感謝したい。